

よみがえる芝居小屋¹⁾

——その社会学的研究序説——

芦田 徹郎

On the Revival of Old-fashioned Local Japanese Theaters, *Shibaigoya*

——Introduction to Sociological Studies——

ASHIDA Tetsuro

Abstract : Over the last few decades, there have been revivals of some old-fashioned local theaters or play-houses, *Shibaigoya*, which were built in Japan before World War II, such as “Koraku-kan” in Akita Prefecture, “Hirose-za” in Fukushima Prefecture, “Nagame-yokyajo” in Gunma Prefecture, “Eiraku-kan” in Hyogo Prefecture, “Wakimachi-gekijo” in Tokushima Prefecture, “Kanamaru-za” in Kagawa Prefecture, “Uchiko-za” in Ehime Prefecture, “Kaho-gekijo” in Fukuoka Prefecture and “Yachiyo-za” in Kumamoto Prefecture. Most of those theaters once closed their doors for good and were brought to the verge of destruction or collapse, but somehow survived and subsequently revived. Nowadays many of them are expected to be centers of revitalization of local communities. I have been investigating the actual situations of a good number of these kinds of theaters, and I have been searching how and why they have revived and how they have been made use of. I have also been considering the effects of the revivals on local communities. In this paper, I will sketch out some aspects of the revival of such theaters.

Key Words : Revival of *Shibaigoya*, Cultural Heritage, Community Design (*Machizukuri*)

1. 今日の芝居小屋の概要

戦前に建設されながら、現在も現役で、公演時には祝祭的な昂揚に包まれる古い芝居小屋が日本全国にいくつもある。しかし、そうした芝居小屋のほとんどは、高度経済成長期前後に、経営不振と老朽化で解体または倒壊の寸前にまで追い込まれ、その後奇跡的に再生を成し遂げたものである。1993年（平成5）には、復興を果たしたりそれを目指す全国の芝居小屋が集まって、「全国芝居小屋連絡協議会」が結成され、例年、情報交換や交流のための「全国芝居小屋会議」も開かれている。私は、こうした古い芝居小屋の復興に注目し、その地域社会学および文化社会学的な、現代的意義と課題の解明を目指している。

具体的には、康楽館（秋田県小坂町）、広瀬座（福島県福島市）、ながめ余興場（群馬県みどり市）、栗津演舞場（石川県小松市）、呉服座（愛知県犬山市）、永楽館（兵庫県豊岡市）、旧金毘羅大芝居・金丸座（香川県琴平町）、脇町劇場（徳島県美馬市）、内子座（愛媛県内子町）、嘉穂劇場（福岡県飯塚市）、八千代座（熊本県山鹿市）の、現在実際に活動（展示・見学を含む）している芝居小屋から、共楽館（茨城県日立市）、鶴川座（埼玉県川越市）、でか小屋（石川県七尾市）、翁座（広島県府中市）、貞光劇場（徳島県つるぎ町）の、現在は転用または閉鎖

1) 本論考は、2011年度から2013年度にかけて日本学術振興会科学研究費の助成を受けた研究課題「よみがえる祝祭空間－芝居小屋復興の文化社会学」の研究報告書に加筆したものである。

されているものまで、研究密度の濃淡はあるが、かなりの数の芝居小屋についての資料収集と現地調査にあたってきた²⁾。

私は、これまで、地域の祭りや地域文化の実証研究を長年継続してきており、芝居小屋復興の研究は、そうした経験とそこから得られた知見に立ち、芝居小屋復興の意味と意義を総体的に把握することを目指している。より個別課題的には、①それぞれの芝居小屋復興の具体的プロセス、②芝居小屋復興の地域社会的要因と時代的背景、③復興した芝居小屋の活動・活用実態、④芝居小屋復興の地域社会へのインパクト、⑤芝居小屋復興の現代社会論的意味、などを明らかにしようとするものである。

本論考は、そうした研究成果をまとめるに先立って、そもそもこうした芝居小屋の復興という事実自体が学界では必ずしもよく知られていないと思われるため³⁾、主としてその経緯の全般的状況を報告するものである。そのため、できるだけ多くの事例を取り上げることに努めたが、その分、概要の提示にとどまっていることは否めない。個々の事例の詳細なモノグラフ、ならびに芝居小屋の復興全体についての包括的な理論的考察は、他日を期したい。

江戸時代において厳しく設置が制限されていた常設の芝居小屋⁴⁾は、明治時代に入って次第に自由な建設が認められるようになり、大正時代には、全国で数千もの多数に上ったものと推定される⁵⁾。しかし、第 2 次世界大戦後は、しばらく演劇や映画で賑わったものの、1960 年代の高度経済成長期に入ると、娯楽の多様化、とりわけテレビの普及の影響を受けて減少し、1970 年代に入るとほぼその姿を消すことになる。

もちろん、その間もその後も、劇場や演劇ホールは各地に建設されるが、それらは西洋風の近代建築が主流であり、木造で和風の（趣が強い）伝統的な形式の「芝居小屋」が新たに建てられることはほとんどなく、もっぱら消滅の一途をたどってきた。見学のための施設の開放なども含め、いまでも何ほどの活動を続けている古い芝居小屋は、全国でもほぼ先に列挙したものに尽き、10 余に過ぎないのではないかと推測されるのである。

数少ない「生きている芝居小屋」にしても、そのほとんどは、いつかは閉鎖の憂き目にあっており、取り壊しあるいは倒壊寸前にまで追い込まれながら、奇跡的に再生を果たしたものである。本研究は、これらの芝居小屋が、いかにして、またどのような理由で復活したのかを追跡するとともに、今後の可能性と課題とを探ろうとするものである。

なお、もともとは村の住民によって芝居（村芝居・地芝居）等が演じられる「農村舞台」に分類するのが妥当だと思われるが、いまでは小屋形式の客席を常設していて、外見上は「芝居小屋」と区別がつきにくいものがある。たとえば、常盤座（岐阜県中津川市）、明治座（岐阜県中津川市）、鳳凰座（岐阜県下呂市）、白雲座（岐阜県下呂市）、東座（岐阜県白川町）、村国座（岐阜県各務原市）、春日座（岡山県美作市）などである。私の当面の研究と本論考では、こうした「小屋」を含め、農村舞台は対象から除外している。

戦後の農村舞台研究をリードした角田一郎は、農村舞台を「農山漁村にある近世芸能の舞台で営業用でないもの」と規定し（角田 1994: 23）、そこで演じられる「芸能」としては「歌舞伎」と「人形」芝居を想定していて、もっぱら「神楽」や「能楽」などを演じるための施設を含めるか否かについては判断を留保している。こうした

2) これらの芝居小屋がすべて全国芝居小屋連絡協議会のメンバーだというわけではない。また、芝居小屋というより、すぐ後に述べる農村舞台に分類されると思われるものなかにも、同会に加わっているものがある。

3) 文化財・文化（産業・歴史）遺産や町並保存などについては、社会科学分野でもそれなりの研究蓄積がある。演劇や演芸などについても同様である。しかし、現代の芝居小屋（の復興）については、建築学や建築史の分野をのぞけば、管見にしてほとんど先例を知らない。そうしたなかでの数少ない先行研究としては、鈴木廣による嘉穂劇場についての論考〔鈴木 1988〕の他、徳永高志の一連のものがある。もともと日本近代史が専門である徳永には、「近代」日本における芝居小屋や文化施設の変遷と盛衰についての労作があり〔徳永 1999・2000・2010〕、それらのなかで、いくつかの現存する芝居小屋も取り上げられている。また、徳永は、昨今の芝居小屋の復興や活用の実践にも深く関わっている。ただし、その徳永にも、「現代」の芝居小屋（の復興）そのものを真正面から取り上げた報告や論考はまだないようである。なお、現在活動している主な芝居小屋の一般的なガイドブックとしては、〔サライ編集部他 1995〕、〔沢他 2005〕などがある。また、中国新聞紙上で 2003 年 9 月から 2005 年 12 月にかけ、30 回にわたって断続的に連載された「幕間の夢 芝居小屋物語」は、今日の「生きている芝居小屋」事情を知るうえで有益である。

4) 江戸時代までの芝居興行は、寺社境内や盛り場などに簡素な仮小屋を臨時に掛けて行われるのが一般的であった。そうしたなかで、江戸時代後期、三都（江戸、京、大坂）には、官許の江戸三座（中村座・市村座・森田座）など複数の常設芝居小屋があったことが知られているが、地方都市の実態は不詳である。

5) 徳永高志は、当時の人口約 100 万人の愛媛県だけで 100 に及ぶ劇場があったと推定されることから、全国では 7 千から 8 千にのぼるものと推計している（徳永 2000: 64）。

農村舞台には、仮設のものと常設のものがあり、1960年代後半の角田らの大がかりな調査では、常設のものだけでも全国で1338棟の現存が確認されている(角田1971:90)。今日でも相当数が残存しているものと思われる⁶⁾。

常設の農村舞台はだいたいが舞台(ステージ)の上に屋根を置くが、客席には屋根がない「野外形式」がふつうである。しかし、なかには客席にも常設の屋根を設けて「劇場形式」をとるものがあり、こうなると、少なくとも外見上は芝居小屋との区別がつきにくくなる。しかし他方では、先に引用した「農山漁村にある近世芸能の舞台で営業用でないもの」という角田の規定との対比において、「芝居小屋」を、「近世から昭和初期にかけて都市(町)部に建設された木造の劇場で、芝居その他の演芸の営業(興業)に供されるもの」と規定することもできるであろう。とはいっても、実際には芝居小屋と農村舞台、伝統的な(和風の)芝居小屋と近代的(西洋式ないしその様式を取り入れた)劇場、営業用と慰安(福利厚生)用などの区別はむずかしいところがあり、過不足のない定義は不可能といわざるをえない。

厳密な定義はともかく、主として明治期以降全国各地に多数建設された芝居小屋では、伝統的な歌舞伎のほか、各種の芝居や演劇、演芸、活動写真(映画)に音楽会や歌謡ショー、さらには演説会やさまざまな集会などで賑わった。こうした芝居小屋は、第2次大戦後のしばらくの時期まで賑わいが続くが、日本が1960年代の高度経済成長期に入るところから衰退期を迎え、多くは映画上映などで生き残りを図るものの、高度成長が頂点に達し、そして終焉に向かう1970年ごろには、ほぼその姿を消していたのである⁷⁾。

2. 「小屋」か「芝居」か? —金丸座・呉服座・嘉穂劇場—

日本の高度経済成長とともに古い芝居小屋が次々と消えていくなかで、廃館ないし休館状態にありながらも生き残っている芝居小屋に、まさに「数少ない生き残り」のゆえに、注目を浴びるものが出てくる。その走りは、1836年(天保7)に「金毘羅大芝居」(こんびらおおしばい)として完成した香川県琴平町の金丸座(かなまるざ)であろう。この芝居小屋は、1953年(昭和28)にいったん香川県重要文化財に指定されるものの、1964年(昭和39)には老朽化を理由に指定を解除される。細々と続いていた映画館としての営業も、そのころ停止する。ところが1970年(昭和45)になって、芝居小屋では初めて、旧金毘羅大芝居として国の重要文化財に指定される。県と国との2度にわたる文化財指定のポイントは、「現存する日本最古の芝居小屋」ないし「現存する江戸時代唯一の歌舞伎劇場」というところにあった⁸⁾。

さらにこの小屋は、1976年(昭和51)に、もともとの町なかの所在地からやや町はずれの現在地に移築され、江戸時代の元来の姿に復原されるが、それは、あくまでも文化財として保存(保護)されるべき建物としてであり、芝居小屋としての使用は大きく制限されるものであった。すなわち、芝居小屋の「小屋」の部分が歴史的価値を持つものとして重視されたのであり、「芝居」を掛けること(興業)は、ほとんど考慮の外にあったのである⁹⁾。

同じころ、1874年(明治7)かそれより少し後に「戎座」として創建され、1892年(明治25)ごろまでに移築され(たと推定されてい)て「呉服座」(くれはざ)と名のっていた大阪府池田市の芝居小屋が、1971年(昭和

6) 農村舞台は、生産・生活構造の変化が比較的緩やかな農山漁村部の地域社会で設置・維持されていて、祭りなどの限られた日に地域行事として使用される施設である。そのため、土地や建物の利用形態が流動的な町場で、私営の日常的な営利事業として興業が行われる都市部の芝居小屋に比べ、社会・経済変動への耐性が強いといえる。[高橋1977]も参照のこと。

7) それに、そもそも芝居小屋には、寺院建築などとは違って、初めから必ずしも永続的な存続が想定(期待)されていないふしがある。文化財建造物の調査や修理が専門で、芝居小屋の復興にも、とくに技術面で、顕著な指導力を発揮している賀古唯義によれば、日本の伝統的な劇場はもともとが仮掛けの小屋であり、本建築になってからも仮小屋っぽい安普請のところを残して、「正面は立派な造りでも、裏に回れば掘っ立て小屋同然」(奈良部和美)といったことも珍しくない(賀古2010)。しばしば地震や火災で損壊しているし、経済原則に従って、必要(不要)とあれば比較的簡単に転用、取り壊し、建て直し等にあいがちである。

8) 金丸座(旧金毘羅大芝居)の「古さ」や「江戸時代建設」の強調については、[飯塚他1947]、[草薙1954]、[松崎1959]、[国重要文化財指定申請書](1969)などを参照のこと。なお、この芝居小屋の基本資料として、文化財建造物保存技術協会編「重要文化財旧金毘羅大芝居修理工事報告書」(琴平町、1976)があるが、私は未見である。

9) 金丸座(旧金毘羅大芝居)移築復元の「こけら落とし」の舞台では、当代の人気上方歌舞伎役者であった中村鴈治郎(二代目)が「浦島」を舞ったが、その折に鴈治郎は「文化財に指定されているため、興行できないのが残念」と語ったという(井上1996:104)。

46), 愛知県犬山市の博物館「明治村」で移築保存されることになった。明治村は、明治時代の建造物等の歴史的資料を収集・公開することを目的に、1965 年(昭和 40)に愛知県犬山市に開館した野外博物館である。この場合も、歴史的に貴重(稀少)な建物としての芝居「小屋」の保存展示が目的であり、火災等で保存を損なう恐れのある「芝居」(その他の実演)は、当初は想定されていなかったのである¹⁰⁾。

このように、スポットライトを浴びる古い芝居小屋が徐々に出てくるなかで、「小屋」(建物)よりも「芝居」(実演・興業)で注目される芝居小屋が現れる。福岡県飯塚市の「嘉穂劇場」である。この芝居小屋は、1931 年(昭和 6)に建設されたものであり、金丸座はもとより呉服座と比べてもかなり新しい。1970 年(昭和 45)当時は、まだ築 40 年ほどにすぎず、建物自体の歴史的・文化的価値は微妙である。ところが、「芝居」を続けている「小屋」は、その頃すでに「時代物」になっていたのである。

旧筑豊炭田を形成していた遠賀川流域(いわゆる「川筋」)には、昭和初期に 30 を超える芝居小屋があったといわれている(桑原他 1974:266)。しかし、戦後は次々と取り壊しもしくは閉鎖の憂き目にあい、1970 年代には、現役としてはこの劇場を残すだけになっていた。その嘉穂劇場にしても、戦後 10 年ほどは年間の開演日数が 300 日を超えていたのが、1960 年代に入るとともに減り続け、1970 年代にはほぼ 30 日台で推移するまでに激減して¹¹⁾、経営は危機的状況にあった。それでも芝居を続ける小屋と、それを「細腕」で支える女性劇場主の生き方¹²⁾に、共感と支援が寄せられるようになる。

1960 年代の中ごろからは、新聞紙面にこの「生きている芝居小屋」を取り上げる記事が現れ始める。そして、1970 年代に入ると、建築学(小屋)や演劇学(芝居)の学問分野からも、関心が示され始めるのである。こうした関心の高まりを集成する形で、1977 年(昭和 52)には、『定本 嘉穂劇場物語』が出版された。興味深いことに、そこには、「劇場[建物]を見にくるだけのお客さんじゃあ、だめなんです。[……]芝居をせん、空っぽの小屋なんか、意味はなかバイ。記念館になるぐらいなら壊してしまおうの方がよかたイ」¹³⁾という、劇場主の証言が収められている(留美坂 1977:101-102)。「芝居を掛けてこそその芝居小屋」という考え方は、その後の芝居小屋復興の主流になっていく。

現役の芝居小屋である嘉穂劇場への注目の高まりから少し遅れて、かつての芝居小屋である文化財・金丸座(旧金毘羅大芝居)での歌舞伎公演が世間の耳目を集める。国の重要文化財指定から約 15 年、また移築復原から 10 年近くが経過した 1984 年(昭和 59)、あるテレビ番組で中村吉右衛門、澤村藤十郎、中村勘九郎という、当時の歌舞伎界の若手ホープのあいだでこの芝居小屋のことが話題にのぼり、ここで芝居をしたいということで意見が一致した。この着想は実現に向けて順調に進み、翌 1985 年(昭和 60)6 月には、中村吉右衛門、澤村宗十郎、澤村藤十郎などの出演で「四国こんびら歌舞伎大芝居」(以下、「こんびら歌舞伎」)が開催され、大きな反響をよんだ。この公演はその後恒例化し、2014 年(平成 26)には、第 30 回記念を迎えた。毎年 4 月(わずかだが 5 月の年もある)の公演期間中は全国から歌舞伎ファンが集まり、町じゅうが華やかな祝祭的雰囲気にも包まれるのである¹⁴⁾。

その間、1995 年(平成 7)の阪神淡路大震災を踏まえ、2003 年(平成 15)から 2004 年(平成 16)にかけて大規模な改修工事が行なわれたが、その際、観覧の邪魔になっていた客席の 4 本の鋼管の柱を取り除いている。それらは、かつての移築復原の際に、実演よりも保存に重きを置いて補強用に設置されていた支柱であるが、後に始まったこんびら歌舞伎などの公演の際には観劇の邪魔になっていた。そのため、柱を取り除いてもなお構造の強度が高まる工夫が施されたのである。

10) 呉服座の明治村への移築復原にあたっては、明治村から池田市の関係者側に「建て物だけでなく、芝居小屋としてもぜひ生かしたい」という意向が伝えられたというが(明治村 1972:160)、当初は消防法等を考慮して実演は差し控えられており、俳優でもあり芸能研究者でもあった小沢昭一がそのことを残念がったという逸話も残っている(明治村 1976:135-136)。建築物としての呉服座については、[博物館明治村 1985・1998]、移築前の呉服座については[池田市立歴史民俗資料館 1995]を参照のこと。

11) 嘉穂劇場のウェブページ(<http://www.kahogekijyo.com/rekishi/kiroku.html>)に掲示されたデータより算出。

12) この女性経営者・伊藤英子氏の劇場人生については、[銅野陽一 1993]に詳しい。

13) このくだりの執筆は深田良。

14) 「こんびら歌舞伎」については[井上 1996]を参照のこと。なお同書は、金丸座(旧金毘羅大芝居)の建物、歴史、現況など、その全体の概要を知る上でも便利である。また、歌舞伎・芸能研究者による「第 1 回こんびら歌舞伎」見物記として、[服部 1994]がある。

とはいうものの、金丸座（旧金毘羅大芝居）が積極的な実演で芝居小屋の活用を図っているかといえば、必ずしもそうではない。この芝居小屋は、復活当初より建物の「保存が第一」という基本原則に立っており、こんびら歌舞伎が始まってからも、「立ったのが天保6年だから江戸歌舞伎〔だけ〕をやるといっしょにしっかりしたポリシーを持っている」との自負を示していた（山鹿八千代座棧敷会 1993:10）。この原則は、いまも変わっていないといっしょに差し支えないであろう。こんびら歌舞伎のほかにも、2006年（平成18）の十八代目中村勘三郎襲名披露公演や、2012・2013年（平成24・25）の坂東玉三郎特別公演など、日を限って例外的に公演が組まれることはあるが、その場合でも、ジャンルは基本的には歌舞伎ないし歌舞伎舞踊に限定されているのである。

3. 「まちづくり」のなかで —内子座・永楽館・ながめ余興場—

1970年代くらいまで、重要文化財はもっぱらその保存（保護）が重視され、建物は展示公開されても、本来の用途での利用は、火災などで建物の毀損を招くおそれがあるため、きわめて困難とみなされていた。その重要文化財での芝居の公演が可能になったことについては、「積極的に活用を図ることによって保存を促すという、〔文化財保護政策上の〕発想の転換」（文化庁 2001:180）があった。かつては、空調設備など今日的な劇場としての使用に対応するための改修も、歴史的・文化的価値を損なうためきわめて困難とみなされており、文化財に指定されれば、「釘一本打てない」といったことが、まことしやか言われていたものであった¹⁵⁾。

こうした文化行政の転換の背景には、より大きな時代の風の変化があったことを指摘できる。1973年（昭和48）にはいわゆる「オイルショック」が起こり、日本の高度経済成長に決定的な終止符が打たれる。翌1974年（昭和49）は、戦後の日本経済が初めてマイナス成長を記録する。そして、時代の大きな流れは、それまでの「経済」一辺倒から「心」や「文化」の重視へと、大きく方向を変える。「ブーム」といわれるほどに「宗教」回帰への注目が集まり、日本各地で「祭り」の復活が話題になる。こうした「心の時代」や「文化の時代」の到来は、他方で、とりわけ、「地方の時代」と言われながらも、実際には「東京一極集中」の進行によって疲弊感と疎外感を強めていた地方地域にとって、「心」や「文化」が「経済」資源になり得ることを予感、また期待させるものでもあった¹⁶⁾。

こうした時代の流れのなかで、古い芝居小屋を「まちづくり」のなかに位置づけ、「芝居」（実演）にも積極的に取り組むことで、「小屋」（建物）の動的な活用を図ろうとする動きも出てくる。たとえば、3年をかけての復原工事をへて、金丸座の歌舞伎公演が始まるのと同じ1985年（昭和60）に復活を果たした愛媛県内子町の内子座がその一例である。同座は、1916年（大正5）に、「大正天皇御大典記念」と称して建設された。戦後は、芝居小屋から映画館、さらには事務所へと転用され、老朽化が進んで存廢の岐路に立つといっしょに、お定まりのコースをたどっていた。

それが息を吹き返すきっかけになったのは、1982年（昭和57）に同町の八日市護国地区が国の「重要伝統的建造物群保存地区」（伝建地区）に選定され、「まちづくり」の方向性が定まったことであった。内子座は、こうした歴史や文化を生かした地域振興の一環として、再生を遂げていくのである。同地区には、かつてろうそくなどの材料である木蠟の生産で栄えた内子の栄華を偲ばせる、古い建物が軒を連ねている。内子座は伝建地区からは少し外れているが、町並みの再評価と共に、歴史遺産の一つに位置づけられたのである¹⁷⁾。

内子座は、いまでは定例の文楽公演でよく知られている。しかも、限られた期間の歌舞伎公演に特化した金丸座とは違って、定例文楽公演だけに用途を限定することなく、もともとが「庶民の娯楽の殿堂」（山鹿八千代座棧敷会 1993:10）だったという認識から、町の行事や住民のイベントなど、日常的にさまざまな催事に供されてい

15) 1996年12月25日付都道府県教育委員会教育長あての文化庁文化財保護部長通知「重要文化財（建造物）の活用について」は、「『釘一本打つこともできない文化財』というような誤った認識が流布している」と注意を促している。しかし、文化財についてのかつての行政指導を顧みれば、必ずしも一方的に「誤った認識」とはいえないであろう。

16) こうした「宗教回帰」や「祭りの復興」、あるいは「心の時代」や「文化の時代」、さらには「地方の時代」をめぐる私見については、[芦田 2001・2007]を参照のこと。

17) 内子座の建物および修復活用の経緯については[宮沢 1995]を、また、内子町の町並みとその保存については[内子町八日市周辺町並保存対策協議会 1978]、[内子町歴史的地区町並保存対策協議会 1987]、[宮沢智士他 1991]などを参照のこと。

る。その意味で「生きている芝居小屋」として復活した例としては、後で述べる「永楽館」とともに、もっとも早いものの一つであろう。内子座は、2016 年（平成 28）に創建 100 周年を迎えるが、それに先立ち、2015 年（平成 27）年 7 月、芝居小屋としては 6 番目の国重要文化財に指定された。

広範な「まちづくり」構想の一環として古い芝居小屋が復活を果たした例としては、兵庫県豊岡市出石町の永楽館のケースも、内子座と似たところがある。いまは豊岡市の一部である（旧）出石町は、江戸時代には城下町として栄え、現在でも「小京都」の一つに数えられている。しかしながら、近代に入ると、次第に時代から取り残されるようになり、特に戦後は急速に活気を失う。そのような状況下で、1901 年（明治 34）に町内に建設された芝居小屋・永楽館も、1964 年（昭和 39）には閉館となる。

ところが、1960 年代の中ごろから出石町でも地域活性化の取り組みが始まり、1980 年代の終わりごろからは、歴史や町並みを生かした町づくりに向けての動きが活発になってくる。そして、出石町は、1987 年（昭和 62）に兵庫県の景観形成地区に指定され、合併して豊岡市の一部となった後の 2007 年（平成 19）には、旧出石町の一郭が伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定された。そのころ、豊岡市は、永楽館を取得して「平成の大改修」と称する復原工事に着手する。伝建地区の指定は、永楽館の復原にも活用された。2008 年（平成 20）に「平成の大改修」は完了し、当時その躍進ぶりで注目を浴びていた若手歌舞伎俳優・片岡愛之助らの出演で「こけら落とし大歌舞伎」がとり行われ、町はお祭りムードに沸いた。愛之助らの公演は、次年度以降も「永楽館大歌舞伎」として定例化し、この芝居小屋をアピールするイベントになっている¹⁸⁾。

群馬県大間々町（現みどり市）の「ながめ余興場」の復興も、「まちづくり」の過程で実現したものである。しかし、こちらは、内子座や永楽館のように、大きな「まちづくり」のコンセプトのなかに芝居小屋が位置づけられたというよりも、「まちづくり」の「運動」から単体で紡ぎ出された趣きがある。

ながめ余興場は、この土地の遊園地内に、1937 年（昭和 12）に建設された劇場である。昭和 30 年代には遊園地及び劇場の最盛期を迎えたというが、この劇場もまた、1965 年（昭和 40）に芝居興行の最期を迎えることになった。その後も、映画館としては比較的遅くまで営業を続けていたが、ついに 1987 年（昭和 62）の遊園地閉鎖にともない、休眠状態に入る。1990 年（平成 2）には、開発計画のため遊園地跡地を大間々町（当時）が買い取り、この建物も町所有になっていた。

丁度そのころ、竹下登内閣の「ふるさと創生（一億円）事業」¹⁹⁾が始まり、これをきっかけに大間々町でも 1991 年（平成 3）に住民と町職員で構成するプロジェクトチームが発足した。そして、この活動をとおして「ながめ余興場」が再発見されるのである。チーム解散後、旧メンバーのうちの有志が集まり、1993 年（平成 5）に、ながめ余興場を核に伝統と文化を中心とした「まちづくり」を進めるための支援団体「ながめ黒子の会」が発足する。ながめ黒子の会は、ながめ余興場を舞台に、人気役者・梅沢富美男の公演など、精力的な活動を展開する。こうした活動が実を結び、1996 年から 1997 年（平成 8-9）にかけ、約 4 億円を費やしての大規模な改修工事が行なわれ、保存は確実なものになった。

その後も、ながめ黒子の会は、2001 年（平成 13）に群馬県下で繰り広げられた国民文化祭で、この劇場が全国演芸祭の舞台となったことをきっかけに、落語の公演に積極的に取り組んでいる。2002 年（平成 14）からは、春夏秋冬各 1 回の「定例落語会大間々ながめ亭」と、秋季の 8 日間にわたる「特別企画・大間々ながめ亭」を開催し、今日に至っている。これらの落語公演は、いまや東京の落語家たち（とくに若手）にもよく認知・評価されており、この劇場のシンボリックなイベントとなっている。

ながめ余興場で特筆すべきは、地方都市の小さな劇場ながら、落語公演以外にもさまざまなイベントが催されて、実演日数が年間 120 日もの多数にのぼるところにある。そうした実績の背景に、こうした住民グループの積極的な参加と関与があることは論をまたない。ながめ黒子の会のこうした活動は高い評価を受け、1998 年（平成

18) 出石町の町並みについては [大場 1991] を、永楽館の建物とその沿革および復原工事については、[豊岡市教育委員会 2009] を、永楽館および出石町と片岡愛之助との関わりについては、[片岡他 2015] を参照のこと。また、戦後の出石町の「まちづくり」の発端から永楽館の復原に至る経緯については、[奈良部 2008] が簡潔である。

19) 当時の竹下登首相の発案で、1988 年から 1989 年にかけて実施された「自ら考え行う地域づくり事業」のことである。全国の市町村に対し、「ソフト」事業ということ以外に用途を限定せず、一律に 1 億円を配布するという「奇抜」な政策の故に、当時大きな話題となった。

10) の「地域づくり団体自治大臣表彰」を嚆矢として、地域づくり関連の表彰を何度か受けている²⁰⁾。

4. 芝居小屋の「底力」－康楽館・八千代座－

大きな「まちづくり」の一環として芝居小屋が復興していった、内子座、ながめ余興場、永楽館などとは逆に、むしろ芝居小屋の復興が「まちづくり」の方向性に大きな影響を及ぼすことさえある。

秋田県小坂町の康楽館は、日本有数の鉱山として栄えた小坂鉱山の従業員慰安施設として、1910年（明治43）に落成した。しかし、この劇場も、戦後のご多聞にもれず老朽化と機能低下が進む。そして、1970年（昭和45）からは、まれに集会や催し物があるものの、映画も含め一般興行を停止していたのである。しかしその後、保存と活用を望む声の高まりを受けて、1985年（昭和60）には小坂町に無償譲渡されて修復が始まり、秋田県による文化財指定をへて、翌1986年（昭和61）に町営の芝居小屋として復活したものであった。

そしてこの年から、大衆演劇「伊藤元春一座」による常設公演が始まる。康楽館が十和田湖およびその周辺の観光コースに組み込まれたこともあって多くの見物客を集め、この公演は、その後20年の間に、実に1万回超という驚異的な公演回数（1日複数回公演）を記録することになる。この常設公演は、その後一座の交代はあったものの、現在も続いている。文字どおり、「生きている芝居小屋」に蘇ったのである²¹⁾。

さらに、康楽館の復活は、「まちづくり」の基本コンセプトをも決定することになる。1990年（平成2）、この芝居小屋が面する通りが「明治百年通り」と位置付けられ整備される。2001年（平成13）には、芝居小屋の隣接地に旧小坂鉱山事務所（明治38年創建）が移築復原されて、一帯は歴史文化観光ゾーンを形成する。そして、翌2002年（平成14）、康楽館は、旧小坂鉱山事務所とともに国の重要文化財に指定され、さらに2007年（平成19）、これら2つの「文化財」は、ともに「近代化産業遺産」に認定された。こうして小坂町は、芝居小屋の復活を契機にして、従来からの基幹産業である鉱工業の他に、その歴史に立った文化観光という、「まちづくり」のもう一つの柱を確立することになるのである²²⁾。

熊本県山鹿市の八千代座の復活も、「まちづくり」の方向性に大きな影響を与えた例である。1910年（明治43）12月に竣工し、翌年1月にこけら落としをしたこの芝居小屋は、康楽館と同じく明治末年の建設であるが、江戸時代の遺風を残すとされている。この八千代座も、他の芝居小屋と同様の盛衰をたどり、1970年ごろにはほとんど使われなくなり、やがて、いつ取り壊されても、そのまま朽ち果てても、不思議ではない、廃屋同然の老残をさらすようになっていた。

ところが、1970年代の中ごろから、再生を願う声が少しずつ上がり始める。1980年代の中ごろには、いまでも語り草の「老人パワー」に牽引され、急激な高まりをみせる。そして、1988年（昭和63）、あたかも住民たちの熱気にあおられるかのように、国による重要文化財の指定が決まるのである。さらに、1990年（平成2）からは、人気女形歌舞伎俳優の坂東玉三郎の公演がほぼ定例化し、5年近い歳月と10億円余りの総工費をかけての「平成の大修理」と呼ばれる半解体的な大規模復原工事を2001年（平成13）に成し遂げ、祝祭の場として、かつての隆盛に勝るとも劣らない復興を遂げることになる。今日では、玉三郎公演の他、歌舞伎や演劇・演芸、コンサートやさまざまな発表会、それに講演会や各種集会での利用も多い。さらには、建物＝文化財目当ての見物・見学者も多数訪れる。このように、八千代座は、いまやこの地の文化と観光の一大拠点となっている²³⁾。

しかも、八千代座復興の効果は、この芝居小屋の活用にとどまるものではない。当時、山鹿市でも古い街道（豊前街道）沿いの町並みを生かした「まちづくり」が模索されていたが、その動きは必ずしもスムーズではなか

20) ながめ余興場については、まとまった事業報告書や調査・研究報告書などは作成されていないようである。この芝居小屋の復興の経緯については、全国芝居小屋連絡協議会主催の第2回全国芝居小屋会議（1994年、於内子座）の資料集「芝居小屋 昨日 今日 明日」にやや詳しいが、一般には入手、参照は難しいと思われる。本論考は、同資料集のほか、ながめ黒子の会の中心メンバーのひとりである、椎名祐司氏提供の資料および証言に依拠している。

21) 康楽館の概要については、[R2アソシエイツ1995]、[康楽館2005]、[康楽館修理委員会2003]、[千葉1993]などを参照のこと。

22) 小坂町の近代化遺産の概要については[秋田県教育委員会1992]、また、康楽館の復興に始まる近代産業遺産を活用した「町づくり」については、[亀沢修2000・2003]を参照のこと。

23) 八千代座の復興経過については、主として重要文化財指定までの経緯について、[芦田2009]でかなり詳細に追跡している。

った。そこに古い芝居小屋の復興が実現したことで、この構想が大きく前進することになる。いわば、一芝居小屋の復興が町の再生への起爆剤の役割を果たすのである。2007 年（平成 19）に出た『山鹿市市勢要覧』は、八千代座の復原は、「山鹿市中心市街地活性化に取り組む上で、だれにとってもわかりやすい“目に見える”目標だった」と振り返っている（山鹿市 2007:5）。また、同じ年にまとめられた「第 2 次八千代座整備構想」は、「活きた芝居小屋」として再生した八千代座を、町の「賑わい」の復活のもと、市民の「誇り」と位置づけたうえで、「しかし、八千代座の底力はこの程度のものではない」とうたい上げている。そして、その背後には「『本物』こそが人々を惹き付けるといふ〔……〕明快な事実」を「八千代座が証明した」という強い自負がある（山鹿市教育委員会 2007:3）。ここで詳述はできないが、ただ「古い」だけでなく、「本物」であればこそという意義づけ（authenticism）は、芝居小屋復興を読み解くひとつのキーポイントであろう。

八千代座の復興が山鹿の「まちづくり」に与えたインパクトでもっとも象徴的な例は、市営温泉施設「さくら湯」の建設である。山鹿は、江戸時代には端的に「湯町」と呼ばれていたほど、古くから熊本を代表する温泉地である。かつてこの地には「桜湯」という、伊予の道後温泉に似た広大な木造の市営温泉施設があった。ところが、湯町・山鹿のシンボリック的存在であった桜湯は、1973 年（昭和 48）、多くの市民に惜しまれながら、老朽化を理由に取り壊される。湯町のシンボルを失ったことへの痛惜は一部の市民のあいだに根強く残り、それが八千代座の保存と「復原」に大きな役割を果たした老人たちを突き動かす原動力の一つになっていた。そして、八千代座の復興とその成果は、ひるがえって、桜湯「復元」への大きな弾みとなり²⁴⁾、2012 年（平成 24）にほぼかつての姿のままに「さくら湯」として復活したのであった²⁵⁾。

康楽館や八千代座の復興にあたっては、文化財基準の緩和という、文化行政の変化も追い風になったところがある。特に八千代座の場合、復興にとって決定的な転換点となった 1988 年（昭和 63）の国重要文化財指定は、いくぶん「唐突」といえなくもない、事態の急展開であった。山鹿市自らがこの芝居小屋を重要文化財に指定するのは、やっと 1985 年（昭和 60）になってのことである。その後も熊本県の指定は受けられないままになっており、県指定を飛び越えての国指定であった。

芝居小屋の重要文化財指定は、1970 年（昭和 45）の旧金毘羅大芝居（金丸座）が最初であるが、当時は、和風建築物の指定は江戸時代までのもの、というのが一応の基準だったようで、この芝居小屋も天保 7 年（1836）の建築である。ところが、1984 年（昭和 59）には、明治 7 年（1874）創建の呉服座が芝居小屋として 2 番目に指定され、さらにその 4 年後には、明治末年の建築である八千代座も 3 番目の指定を受ける。その後も、八千代座よりわずかに早く落成した康楽館が、2002 年（平成 14）に指定を受け、さらに 2007 年（平成 19）には、近代化産業遺産にも認定されている。またこの間には、1887 年（明治 20）ごろ現在の福島県伊達市梁川町に建設され、いまは福島市内の「福島民家園」に移築保存されている「広瀬座」が 1998 年（平成 10）に指定を受けている²⁶⁾。さ

24) 「復原」も「復元」も、一般的には、同じく「もとにかえすこと。もとの位置・形態にもどすこと」（『広辞苑』岩波書店）を意味するが、ウェブページの現代美術用語辞典「Artwords（アートワード）」によれば、「建築分野の領域においては、復元とは失われて消えてしまったものを、かつての姿どおりに新たに作ることをいい、復原とは始めの姿が改造されたり、変化してしまった現状を元の姿に戻すことをいう（立石龍壽）」（<http://artscape.jp/artword/index.php/%E5%BE%A9%E5%85%83%EF%BC%8F%E5%BE%A9%E5%8E%9F>）。この区別に従えば、損壊や改造の部分を元に戻した八千代座の復興は「復原」であり、いったん完全に消滅した建築物を新たに再興したさくら湯（桜湯）のそれは「復元」ということになる。ただし、「元に戻す」といっても、どの状態に戻すかは微妙である。八千代座の「復原」も、正確には明治期末の創建当初のままに戻されたわけではなく、「どの時代に復すれば最も文化財的価値が高まるかを検討した」結果、この芝居小屋の最盛期であった（といわれている）大正末期から昭和初期にかけての状態（と推定される形態）に「復原」されている（山鹿市 2001: 88, 97）。他の芝居小屋、ひいてはあらゆる歴史的建造物や遺跡・遺構の復興についても同様の事情がある。保存、修理、修復、整備、復原、復元、復興、再興、再生といった類似的諸概念は必ずしも整理されていないようであるが、これらの用語法（の未整備ないし混乱）には、文化財や歴史（文化・産業）遺産をどう捉えるのかについての重要な論点がはらまれているように思われる。とりあえず、[日本建築学会 1993]の特集「保存・修復・復元のフィロソフィー」あたりを参照のこと。

25) 2010 年（平成 22）に策定された「さくら湯再生基本構想」は、次のように、さくら湯再生の意義を八千代座の整備と関連づけて述べている。「今回のさくら湯再生構想においては、これまでの山鹿市の歴史や文化を継承し、これを具体的に表すシンボリック施設として、八千代座や豊前街道の街並みに匹敵して後世に残るさくら湯の再現を目指しています。そのため、さくら湯再生は八千代座同様 100 年の大計として整備すべきであり、いまだ多くの市民の心に残る姿として、できる限り昔のさくら湯に近い形で、本物の再生をめざすべきです。」（山鹿市 2010: 15）

26) 広瀬座については、[福島市教育委員会 1996] および [橋本今祐 2011]（第三章 伊達郡三座の経営と芸能興業）を参照のこと。

らに、2015年（平成27）には、大正期に入って5年（1916）に建設された内子座も指定を受けることになった。これらの立て続けの重文指定が「生き残った芝居小屋」の権威づけに大きな一役を買っていることはいうまでもない。

明治以降の建造物については、1875年（明治8）に建立（再建）された巖島神社大鳥居（広島県）が、早くも1899年（明治32）に重要文化財に指定された例などがあるが、保護の必要性が広く認識されるようになったのは、1950年（昭和25）に文化財保護法が制定された後、さらに1960年代に入ってからである。それも、まずその対象となったのは主として近代洋風建築であり、明治以降の和風建築についての指定が進むのは、1992年（平成4）に文化庁の主導で「近代和風建築の総合調査」が始まってからのことであった²⁷⁾。1998年（平成10）の広瀬座、2002年（平成14）の康楽館、2015年（平成27）の内子座の指定は、こうした文化行政の流れに符合している。江戸時代創建の旧金毘羅大芝居（金丸座）が1970年（昭和45）という比較的早い時期に指定されたのは別としても、明治に入って建設された呉服座と八千代座が1984年（昭和59）と1988年（昭和63）に指定されたのは、そうした時代の流れの転換を先取りするものであったといえる²⁸⁾。

5. 芝居小屋復興の岐路 — 翁座・粟津演舞場・脇町劇場 —

ここまで、いくつかの芝居小屋復興の「成功」事例とその背景をみてきたが、もちろん、こうした試みがいつも実を結ぶわけではない。

広島県府中市上下町に「翁座」という、かつての芝居小屋の建物がいまでも残っている。上下町は、江戸時代には天領として代官所が置かれ、石見（大森）銀山の産出銀を用いた金融貸付業（「上下銀」）が発達し、また山陽と山陰とを結ぶ石州街道の宿場町としても栄えたという。町の賑わいは近代に入っても続き、翁座は、大正末年から昭和初年にかけて、そうした町の有力者たちが資金を出しあって建設された。もともとは歌舞伎上演も可能で、京都の南座の内部を模したという話もある。この芝居小屋も、戦後は映画上映などでしのいでいたが、1960年代の初めごろに閉館し、いつかはキャバレーや工場に利用されたりした後、長く物置状態が続いていた²⁹⁾。ところが、1980年代に入って町内にアマチュア劇団が結成されたり、町おこしグループが発足したりして、古い芝居小屋を見直す動きが起こり、落語会、一人芝居、ロックコンサート、神楽、講演会などが散発的に開かれるようになる。

そうしたなか、1993年（平成5）になって、人気タレントの萩本欽一がゲスト出演した地元テレビ番組で翁座が紹介され、萩本が自ら監督した映画の上映を呼びかけたことで、復興への気運が一気に盛り上がる。翌1994年（平成6）4月には、「翁座復興を支援する会」の設立準備委員会が結成され、同年9月の上映会では、県内外より集まった客で翁座はあふれかえったという。この成功を受けて花道や棧敷も再建された。1997年（平成9）からは、年に一度、舞踊、演劇、音楽、手品など、町内外のグループが集まり、芸を披露する「翁座まつり」も所有者の主催で始まる。2000年（平成12）には、国民文化祭広島2000の奇術と落語の会場にも選定され、それに先立って県の補助で外壁も整備された。

ところが結局は、この芝居小屋は、2010年（平成22）3月末をもって全面的に閉館することになった。光熱費や借地料に加え、老朽化で雨漏りがひどくなった屋根の修復にも多額の費用が見込まれていた。さらには、地元商工会を通じて市から交付されていたわずかな補助金も財政難を理由に毎年減額されてゆき、ついには、年15万円になっていた交付金さえ不支給が決まった。この芝居小屋は個人所有・経営であり、物心両面での孤軍奮闘には限界があったのである。翁座の閉鎖を前にして最終回となった「翁座まつり」のプログラムに載せられた主催

27) このあたりの経緯については、[文化庁2001:134]を参照のこと。

28) それにしても、芝居小屋のなかで国の重要文化財指定が占める割合の高さは、注目に値するものではないか。まだ人知れず眠っているか復原を待っているものもあるとは思われるが、芝居小屋として現存していて明治期までに建設されたものは、これまでにすべて指定されたのではないと思われる。大正期に建設されたものなかでも、内子座の指定例がある。また、重要文化財ではないが、昭和に入って（6年・1931）建設された嘉穂劇場は、2006年（平成18）、国の登録有形文化財（建造物）に指定されている。今後も、大正期や昭和期に建造された芝居小屋の国重要文化財指定が続く可能性は十分にある。

29) [藤森他1999]、[上下町史編纂委員会他2003:534-537]等を参照のこと。

者 (=小屋の所有者) の挨拶文³⁰⁾からは、補助金打ち切りをもって、金銭的な痛手をこうむることよりも、この芝居小屋が「無用物」扱いされた(と受け止めた)ことの無念と、そのため閉鎖を決断せざるを得なかったことの不本意とを、容易に読み取ることができる。

芝居小屋復興の成否の分かれ目はどこか、難しい問題である。石川県小松市の粟津温泉に所在する「粟津演舞場」は、収容人数 250 人の小さな芝居小屋である。以前は旅館の倉庫として使われており、地元住民からも、かつて芝居小屋であったことさえ忘れ去られていた。そして、建物の解体も決まりかけていたのである。それが、2004 年(平成 16)、八千代座や金丸座など、全国の芝居小屋の復興や修理に関わってきた一人の建築家(賀古唯義)の目に偶然留まったことをきっかけに、一気に復原へと走り出す。

地元関係者の話などから、この「倉庫」は、もともとが 1933 年(昭和 8)に建てられた「粟津演舞場」という名の芝居小屋であるが、わずか 10 年ほどで軍需工場となり、戦後は鉄工所から、やがて旅館やその従業員宿舎へと転用され、最後は倉庫になって、その由来を知る人もほとんどないままに、残存していたことがわかった。これをきっかけに、賀古や地元建築士たちにより建物の構造などの調査が断続的に行われ、2009 年(平成 21)2 月には「粟津演舞場を救う会」も結成される。この「救う会」の活動は地域内外に大きな反響を呼び、小松市からも資金援助を受けることができた。そしてわずか数ヶ月のあいだに、仮設のわか作りながらかつての芝居小屋の体裁を再現させ、同年 7 月には「粟津演舞場平成のこけらおとし」と銘打って、和太鼓、能、大衆演劇などの多彩なイベントを 3 日間にわたって繰り広げ、多くの来場者で賑わった。

このイベントの後、粟津演舞場の保存復原運動はさらに本格化する。「救う会」の熱心な活動と「こけらおとし」の成功を受けて建物の取り壊し計画は白紙に戻された。2012 年 5 月には旅館の経営者など地元住人によって「一般社団法人粟津演舞場」が設立され、いまでは、この芝居小屋は社団法人の所有となっている。そして、2013 年(平成 25)には小松市の景観重要建造物の第 1 号に指定され、同年 9 月には、粟津演舞場の保存改修のための「粟津温泉地区景観まちづくり推進費」が計上され、12 月には本格保存修理工事に着手した。土地の取得費を含めた総事業費約 6 千万円のうち約 4 千万円に公的助成があり、残りは借入れや地元住民の寄付などで補ったという。そして、2014 年(平成 26)4 月には、みごとに完全復活を果たすのである。

2015 年(平成 27)2 月には、「景観形成上重要な地域の新しいシンボルとして、小松市の景観重要建造物に指定されるだけでなく、当該施設で開催される地元粟津温泉太鼓や民謡などの公演は、地域の新たな魅力として、町の賑わいにも大きく貢献している」として、石川県の平成 26 年度「いしかわ景観賞(景観審議会会長表彰)」を受賞している。いまでは、管理人(館長)が常駐して見学が可能であり、おおむね隔月に落語会(「サンキュー落語」)が開かれるなど、必ずしも頻回ではないが実演が催されている³¹⁾。

すっかり忘れ去られていた粟津演舞場が「発見」されてから、わずか 10 年のあいだの急展開の復活劇を顧みれば、いったん閉鎖した翁座にも、捲土重来のチャンスがないとは言い切れない。事実、翁座と同じような運命をたどりながら、命脈が尽きる寸前になって息を吹き返した例として、「うだつの町並」で知られる徳島県美馬市脇町の「脇町劇場」(「オデオン座」)がある。1934 年(昭和 9)に建設されたこの芝居小屋もやがて映画館に衣替えし、その映画館も 1995 年(平成 7)には閉鎖して、取り壊しの話しも出ていた。ところが、1996 年(平成 8)に山田洋次監督、西田敏行主演の松竹映画「虹をつかむ男」で、映画館「オデオン座」としてロケ舞台になったことがきっかけに、にわか保存に向け大きく舵を切る。1998 年(平成 10)には(旧)脇町の文化財に指定され、1999 年(平成 11)には 1 億 6 千万円をかけての解体復原工事により往時の芝居小屋の姿に修復された。こうして、いまでは町の文化・観光拠点の一つになっている³²⁾。

30) 「〔前略〕上下町にとって『翁座』という物の存在が薄れ、必要性のない建物のように上下町商工会理事会の席で決まりました。という事は、府中市よりの意向と受け取りましたので、私どもとしましては、これ以上経費をかけていく自信もなく、熟慮した末、やむなく来年三月をもちまして、閉鎖させて頂く事に決めました。〔後略〕」

31) 粟津演舞場については、この芝居小屋の「発見」から仮復興までは、[奈良部 2009]を参照のこと。その後の本格復興までの経緯については、一連の過程で決定的に重要な役割を果たした関係者のひとりである賀古唯義氏からの教示の他、小松市のウェブページでの告知や新聞記事等を参考にした。

32) 他方、脇町に隣接する徳島県つるぎ町の旧貞光町も「うだつの町並」を残しているが、この町には「貞光劇場」という 1932 年(昭和 7)に建てられたかつての芝居小屋が、いまは完全に扉を閉じたまま残っている。近年まで現役としては日本最古の部類に入る映画館として営業していたが、ついに 2011 年(平成 23)には閉鎖となり、現在に至っているのである。なお、この建物については、所有者の好意により、2015 年 11 月に筆者単独で見学の機会を得た。その際の印象で

2013年3月、上下町の春の観光イベントである「上下ひなまつり」において、翁座もひな人形の展示会場の一つとして使われた。閉館からちょうど3年目の再公開である。その間、雨天には床下が水浸しになるほど建物の荒廃が進んでいたが、所有者は約200万円の私費を投じて、この閉鎖した芝居小屋の屋根瓦の補修をしている。再開を望む地域住民の声に押されてのことだったという。また、同年11月には、広島県内の「訪れたい」と思わせる魅力ある建物を選ぶ、県主催のイベント「ひろしまたてものがたり」では、「ベストセレクション30」に24位で入選している。この芝居小屋への少なからぬ心情的支持のあることを示唆するものである。

翁座の保存、復原、活用については、たんに地域住民の心情的な支援にとどまらない動きも見られる。2014年（平成26）末には上下町の住民有志によって、町の歴史的な建造物の維持や観光客の増加策など、町の活性化を目的に「上下まちづくり協議会」が結成された。この協議会では翁座の保存にも取り組み、2015年（平成27）に、雨漏りが進んでいる屋根瓦、風雨で破損した外壁、濡れて腐食の進んだ天井板など、緊急性の高い項目の修理を行ない、同年8月には、改修完成式典と地元有志による舞台演芸をとり行った。

この修理は、広島県と府中市から併せて約500万円の助成を受けてのものであり、行政にも翁座の保存に向けての前向きな姿勢をうかがうことができる。また、こうした一連の活動や運動の組織化には、町の歴史遺産を活かした地域活性化にも積極的に取り組もうとしている「上下歴史文化資料館」の存在も大きい。普段は扉を閉ざしたままの翁座の運命については依然として予断を許さない。しかし、決して将来までもが閉ざされてしまったわけではないのである³³⁾。

6. 続く模索 —共楽館—、そしてそれぞれの課題

復興運動が続いているものの、いまだ本懐を遂げるに至っていない芝居小屋としては、「でか小屋」（石川県七尾市）、「鶴川座」（埼玉県川越市）などがある。他方、本来の芝居小屋としての復活は無理としても、別の意義づけでの保存を模索する例もある。

茨城県日立市には市立の武道館があるが、これは、元来は「共楽館」という名の芝居小屋であった。日立市はもともと鉾山で栄えた町であり、共楽館は、秋田県小坂町の康楽館と同じく、鉾山従業員の福利厚生施設として、1917年（大正6）に建設されたものである。1960年代の初めごろ、この芝居小屋の利用はすでに映画上映が主流になっていたが、それも減少して小屋の存在意義が問われるようになる。そして、1967年（昭和42）には、建物が日立市へ寄贈されたのを受けて、廻り舞台、奈落、花道、映画向け固定椅子、2階棧敷席などが撤去され、外観はもとの芝居小屋のままで、武道館に転用されることになった。ここに共楽館は、「芝居」小屋としての役目を終えるのである。しかし、見方を変えれば、別用途に転用されることで、芝居「小屋」は生き残る道が開けたともいえよう。

この（元）芝居小屋についても、1990年代の初めごろから地域文化の発信基地にしようという声が上がりはじめ。1993年（平成5）には「共楽館を考える集い」と称する住民たちの会が発足し、芝居小屋としての共楽館の復権と活用・復原に向けて活動を開始する。1990年代の半ばごろには、鉾工業都市という地域の歴史特性を踏まえ、守るだけの「文化遺産」ではなく、活用する「産業遺産」を、という方針も明確になってくる。この方針のもと、芝居小屋も産業遺産群のなかに位置づけられ、同会は、1997年（平成9）に全国町並み保存連盟に加盟する。こうした運動は徐々に実を結び、1999年（平成11）には、「旧共楽館」が国の登録有形文化財に認定され、「共楽館を考える集い」も、2000年（平成12）に、総務省の「ふるさとづくり」表彰を受けた。

こうした運動とその成果に応えるように、行政の側でも、この（元）芝居小屋の保存と積極的活用に向けての施策が図られるようになる。2001年度（平成13）の日立市の基本計画には、「産業遺産再発見事業」と「共楽館活用の検討」が掲げられ、産業遺産による町おこしが明記された。そうしたなか、2003年（平成15）の調査で、

↘ は、屋根や外壁などの外装も、客席などの内装や映写設備も、よく管理が行き届いているように見え、映画館としてならすぐにでも再開できそうな気配であった。しかし、いまのところは復活に向けての表立った動きは見られない。

33) 翁座の現状については、あまり組織だった保存運動が展開されていないこともあって、まとまった研究・事業報告書や資料集などはない。本論考の作成にあたっては、主として、上下歴史文化資料館と小屋の所有者である田中憲享・喜江夫妻とから貴重な教示を得た。

予想以上の雨漏りや老朽化の実態が明らかになる。また、2006 年（平成 18）の耐震調査では、「震度 6 で倒壊の恐れあり」との結果が報告された。こうした登録有形文化財の危機的状況を前に、日立市は、「旧共楽館」の保存の意思を明らかにし、2010 年（平成 22）には創建以来となる大改修に着手する。そして、翌 2011 年（平成 23）3 月 11 日、東日本大地震の発生である。日立市も震度 6 の強烈な揺れに見舞われた。しかし、共楽館は耐震工事完了後（公式の竣工は後日）であったため、ほとんど無傷で健在であった。この（元）芝居小屋にあっては、まこと不幸中の幸いであったというべきであろう。

復活した（旧）共楽館は、外観は広大な芝居小屋の威容を誇っているが、内部及び機能、それにこの公共施設の位置づけ（名称）は、あくまでも日立「武道館」であって、けっして芝居小屋ではない。そういう意味では、芝居小屋の復興はまだ道半ばであり、「共楽館を考える集い」の活動は、完全復原に向けていまも精力的に続けられている。しかし、復興運動の関係者のなかにも、芝居小屋としての再生は非現実的だとして、それを近代化産業遺産（群の一つ）として位置づけ、「芝居」小屋ではない芝居「小屋」の保存の積極的意義を見出そうとする考えがある。一つの知見と方向性であろう³⁴⁾。

首尾よく芝居小屋としての復活を果たし、市民権を確立しているように思われる芝居小屋にも課題は多い。それは、簡単にいえば、「小屋」（建物）と「芝居」（活動）との相生と相剋とすることができる。建物としての芝居小屋の側面に着目すれば、（有形）文化財として、復原、保存、展示に焦点が置かれることになる。他方、もともとの興業施設としての機能を重視すれば、復興、利用、公演（事業）に期待が寄せられることになる。古い芝居小屋は、守られるべき文化遺産なのか、活用すべき（活用可能な）経済資源なのか。もちろん、双方の両立ないし相生（相乗）が望ましい。しかし、現実には両者の葛藤（相剋）も珍しくない。これは、一方では「文化財（遺産）」というものの意義や価値をどう捉えるかという理念的な原理・原則に関わる問題であり、他方では「文化財（遺産）」という「物」はいかにして生き残れるかという現実的な生存戦略・戦術に関わる課題でもある。

芝居小屋の復興には、それが「まちづくり」の契機となることへの期待が大きい。そのひとつは、見物客や見学者などを呼び集める観光資源にしたいという願望である。しかし、こうした施設の復原や維持管理には多額の費用がかかり、むしろ地域社会への重い経済的負担となるおそれがある。また、経済的な費用対効果は別にして、地域社会のアイデンティティや誇りや愛着を高める象徴的機能への注目もある。けれど、こうした文化的価値への共感が、地域住民のあいだでさえ、どれほどの拡がりをもつか、疑問無しとしないところもある。

ひと口に古い芝居小屋といっても、それぞれの建設年や歴史的沿革、建物の工法や形態、規模や収容力、所有や経営（運営）の主体などは、さまざまである。同じような時代の空気なかで注目が集まったといっても、それぞれの芝居小屋復興のきっかけや経緯は多様である。それぞれに注がれている支援や期待の方向や強さも、一様ではない。芝居小屋復興の意味を十分に把握するためには、マクロな時代背景の把握と同時にミクロな復興プロセスの分析の両方が不可欠である。今後の課題としたい。

参考文献・資料

- 秋田県教育委員会 1992、『秋田県の近代化遺産－日本近代化遺産総合調査報告書』（秋田県文化財調査報告書 第 218 集）、秋田県教育委員会
- 芦田徹郎 2001、『祭りと宗教の現代社会学』、世界思想社
- 芦田徹郎 2007、「地方の時代と文化戦略－その虚実をめぐって」、『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』43
- 芦田徹郎 2009、「芝居小屋『八千代座』の復興と老人たちの元気」、芦田徹郎（編）『老人たちの「元気」についての地域文化論的研究』、甲南女子大学（科研費研究成果報告書）
- R2 アソシエイツ 1995、『康楽館修復 10 年史』、康楽館
- 飯塚友一郎他（飯塚五郎蔵）1947、「現存最古の劇場建築 琴平の金丸座」、『建築文化』（12）
- 池田市立歴史民俗資料館 1995、『舞台と銀幕の世界－池田の呉服座・明治座と昭和大阪芸能史』、池田市立歴史民俗資料館
- 井上正三 1996、『こんびら歌舞伎』、保育社
- 内子町八日市周辺町並保存対策協議会 1978、『愛媛県内子町伝統的建造物群調査報告書』、内子町
- 内子町歴史的地区町並保存対策協議会 1987、『伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書 六日市・八日市護国地区』、内子町

34) 共楽館については、[共楽館史料調査会 1999]、[共楽館を考える集い 2004・2014] を参照のこと。また、本論考の作成にあたっては、「共楽館を考える集い」の機関紙「共楽館」も参考にした。

- 大場修（編）1991、『出石城下町の町家と町並み－出石旧城下町歴史的町並み調査報告書』，出石町
- 賀古唯義（インタビュアー・奈良部和美）2010，「江戸時代の息吹をつなぐ芝居小屋の魅力とは」，ウェブサイト“Performing Arts Network Japan”，国際交流基金
- 片岡愛之助他（清水まり）2015，『愛之助が案内－永楽館ものがたり』，集英社
- 嘉穂劇場 2005，『飯塚市登録文化財 嘉穂劇場復旧工事報告書』，嘉穂劇場
- 亀沢 修 2000，「近代産業遺産の観光活用と町づくり」，月刊文化財（443）
- 亀沢 修 2002，「重要文化財『旧小坂鉦山事務所』と『康楽館』－歴史的意義を背景とした保護と活用」，月刊文化財（465）
- 共楽館史料調査会 1999，『史料集 共楽館－地域と共に歩んだ五十年』，日上市郷土博物館
- 共楽館を考える集い 2004，『共楽館をみつめて十年』（共楽館を考える集い 10周年記念誌），共楽館を考える集い
- 共楽館を考える集い 2014，『共楽館と共に 20年』（共楽館を考える集い 20周年記念誌），共楽館を考える集い
- 草薙金四郎 1954，「歌舞伎劇場としての『金丸座』」，『香川県文化財調査報告 第三集』，香川県教育委員会
- 草薙金四郎 1955，『現存最古の劇場 金丸座』，香川県教科図書
- 桑原三郎他（國弘英昭）1974，「筑豊の劇場群（都市劇場について）」，『日本建築学会九州支部研究報告 計画系』21
- サライ編集部他（明石和美）1995，『全国「芝居小屋」巡り』，小学館
- 沢 美也子他（田中まこと）2005，『にほん全国芝居小屋巡り』，CCC メディアハウス
- 上下町史編纂委員会他（上下町教育委員会） 2003，『上下町史〈通史編〉』，上下町
- 角田一郎（編）1971，『農村舞台の総合的研究－歌舞伎・人形芝居を中心に』，桜楓社
- 角田一郎（編）1994，『農村舞台探訪』，和泉書院
- 康楽館修理委員会 2003，『重要文化財 康楽館保存修理（部分）工事報告書』，小坂町
- 康楽館 2005，『康楽館修復 20年史』，康楽館
- 鈴木 廣 1988，「嘉穂劇場について」，『人類科学』（41）
- 高橋秀雄 1977，「町の芝居小屋見聞記」，留美坂 英（編），『定本嘉穂劇場物語』，創思社出版
- 千葉克介（写真・稲 雄次）1993，『ザ・康楽館－東北の奥に佇む明治文化の足跡』，R2 アソシエイツ
- 銅野陽一 1993，『心棒ひとすじ－嘉穂劇場とともに 伊藤英子聞書』，西日本新聞社
- 徳永高志 1999，『芝居小屋の二十世紀』，雄山閣出版
- 徳永高志 2000，『劇場と演劇の文化経済学』，芙蓉書房出版
- 徳永高志 2010，『公共文化施設の歴史と展望』，晃洋書房
- 豊岡市教育委員会 2009，『永楽館復元の軌跡－永楽館復原工事報告書』，豊岡市教育委員会
- 奈良部和美 2008，「兵庫県豊岡市（旧出石町）出石永楽館」，地域創造（24）
- 奈良部和美 2009，「石川県小松市 粟津演舞場」，地域創造（26）
- 日本建築学会 1993，『建築雑誌』Vol.108（No.1346）
- 博物館明治村 1972，『明治村評判帖 3』，博物館明治村
- 博物館明治村 1976，『明治村評判帖 5』，博物館明治村
- 博物館明治村 1985，『明治村建造物移築工事報告書 第4集 呉服座』，博物館明治村
- 博物館明治村 1998，『重要文化財（建造物）旧呉服座保存修理工事報告書』，博物館明治村
- 橋本今祐 2011，『明治国家の芸能政策と地域社会－近代芸能興業史の裾野から』，日本経済評論社
- 服部幸雄 1994，「讃州金毘羅大芝居訪問記」，服部幸雄，『大いなる小屋 江戸歌舞伎の祝祭空間』，平凡社ライブラリー
- 福島市教育委員会 1996，『旧広瀬座移築保存工事報告書』，福島市教育委員会
- 藤森敬一他（岡 香保里，佐藤紀子）1999，「町の芝居小屋－翁座」，『日本建築学会北陸支部研究報告集』（42）
- 文化庁 2001，『文化財保護法五十年史』，ぎょうせい
- 松崎茂 1959，「金丸座について」（謄写版資料）
- 宮沢智士他（三沢建築写真事務所）1991，『内子の民家と町並み』，内子町
- 宮沢智士（責任編集）1995，『芝居小屋内子座 80の年輪』，内子町町並保存対策課
- 山鹿市 2007，『山鹿市市勢要覧』，山鹿市
- 山鹿市教育委員会 1990，『八千代座』（重要文化財指定記念誌），山鹿市教育委員会
- 山鹿市教育委員会 2001，『国指定重要文化財 八千代座』，山鹿市教育委員会
- 山鹿市 2001，『重要文化財 八千代座保存修理工事報告書』，山鹿市
- 山鹿市 2010，『さくら湯再生基本構想』，山鹿市
- 山鹿市教育委員会 2007，『第2次八千代座整備構想』，山鹿市教育委員会
- 山鹿八千代座敷敷会 1993，『全国芝居小屋交流会報告書』
- 留美坂 英（編）1977，『定本 嘉穂劇場物語』，創思社出版